みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

中米の民族

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5815

中米の民族

国立民族学博物館教授　　八杉 佳穂

中米というのは，英語のミドル・アメリカにあたることばで，ふつうメキシコからパナマまでの国をさすことばとして使われている。ところがメキシコでは，中米にあたる語は，メヒコ・イ・アメリカセントラル（メキシコと中央アメリカ）といい，自分たちは北米に属するとみなしている。この地域を指すことばには，そのほか，中央アメリカ（セントラル・アメリカ）とメソアメリカということばがあり，人により理解が異なり，混乱をきたしているようである。おそらく，中央アメリカは，グアテマラから南の，ベリーズ，ホンジュラス，エルサルバドル，ニカラグア，コスタリカ，そしてパナマまでの7か国をさす地理的，政治的なことばと解するのがふつうではなかろうか。これに対して，メソアメリカは，はっきり定義されたことばであり，マヤ文明やアステカ文明などが栄えた文化領域をさす。おおよそ，メキシコの南半分と，グアテマラ，ベリーズ，それにホンジュラスとエルサルバドルの西半分が含まれる地域である。

中米の古代文明

この地域は，世界の4大文明に匹敵する重要な地域と思うのであるが，わが国ではあまり問題にされることはない。それは，おそらく，この地域の国々が現代社会に与える影響が少ないからであろう。征服された地域であることも関係するのかもしれない。もしかすると，この地域の人々が旧大陸から移動したモンゴロイドであり，文明はその亜流に過ぎないという思いがあるのかもしれない。しかしなんといっても最大の原因は，学問の伝統が浅いことによるに違いない。

中米に住む先住民は，人種的にはモンゴロイドだといわれている。ときおり，人種的な話を文化に直接結びつける人がいるが，言語学的，文化的にさかのぼることができるのは，せいぜい紀元前2,000年くらいである。モンゴロイドの拡散は，1万年以上前の話であるので，単位が一桁違い，とてもモンゴロイドだからといって，マヤ文明とアジアの文明を結びつけるわけにはいかないのである。

中米で発展した文明が，4大文明に匹敵するといったのは，ここに文字が発生したからである。わが国では，中米も南米も区別されず，中南米ということばひとつで片づけられることが多いが，南米の文明と決定的に違うところは，中米には文字があったが，南米では文字は発達しなかったところにある。

中米には，マヤ文字やサポテカ文字，アステカ文字など十指にあまる文字体系があった。これらのほとんどは16世紀のスペイン人の征服以前にすでにすたれていたが，アステカ文字のように，その当時も使われていた文字もあった。

文字はいわば人類の英知の結晶である。しかし技術的には，ずっと石器時代であった。それにもかかわらず，ピラミッドをはじめとする建築物や石彫の美しさ，繊細な土器や複雑な暦などをみると，中米の文明は旧大陸の諸文明に引けを取らないといってよい。

中米に文明が生まれたのは，紀元前12世紀頃で，それをオルメカ文明という。メキシコ湾岸の低地帯である。以後，高地ではサポテカ文明やアステカ文明など，低地ではマヤ文明などが生まれては滅んだ。

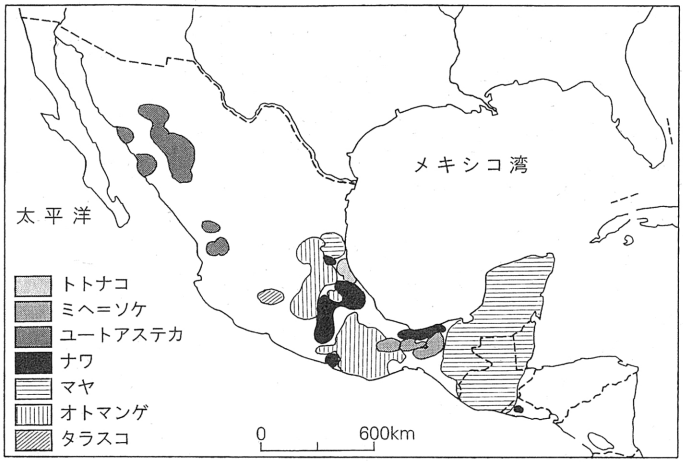
地図をみてもわかるように，中米があるところは北緯10度から30度くらいであるが，その中心のメソアメリカは北緯20度前後である。熱帯から亜熱帯地域であり，低地はたえず暑いが，中米の背骨ともいえるシエラマドレ山脈が南北に走っており，高地は涼しい。高地と低地という環境の違いが，資源や作物などの交換，人的な交流を生み，諸文明が発展していったと思われる。

こうした文明が，16世紀の征服により，ほとんど根こそぎ失われてしまった。

中米の諸民族

マヤやアステカはすでに有名ではあるが，わが国では，どちらかというと，ロマンの対象に過ぎず，学問の対象となっているという認識は少ないように思われる。これが現在住んでいる人々となると，もっと知られていないのではなかろうか。

中米の場合，メキシコとグアテマラに先住民は集中している。とはいってもメキシコの場合は，1990年の統計では全人口は8,124万9,645人であるが，ことばを話す5歳以上の全人口7,056万2,202人に対し，先住民の



メソアメリカの言語分布

後帯機で布を織るマヤの女性

言語を話す人々は528万2,347人で，約7.5％にすぎない。ほとんどがメスティソと呼ばれる混血である。これに対して，グアテマラの場合，1994年の統計では，全人口833万1,874人に対し，先住民の人口は347万6,684人で，全体の約42％を占める。そして15歳以上の文盲率は35.8％に達している。この2か国がほとんどを占め，グアテマラ以南の国々には，約35万人いるだけである。

中米には100近い言語が話されている。民族とはなにかは，民族学者を悩ませる基本的な問題のひとつであるが，中米の場合，言語グループを民族の単位とみていいだろう。もちろんこれはアイデンティティの問題であり，村ごとに異なる民族衣装から，文化は村ごとに違うといえることもあるだろうし，場合によっては，自分たちはメキシコ人とかグアテマラ人であるということもあり得る。政府の時の政策で，インディヘナであったり，メスティソであることもあるが，そうした自己認識に，言語の違いは深く影響を与えていることは間違いない。

ほとんどの言語グループは，メソアメリカと呼ばれる古代の諸文明が展開した中米の中心域にいる。その北はユートアステカ語族のいくつかの言語（約20万）のほか，セリ語（560人）やユーマ語族（560人）がいるだけである。一方南は，南米の言語に属するチブチャ語族やミスマルパ語族などである。これには黒人との混血であるガリフナやミスキトなども含まれる。

中米の中心でもあるメソアメリカにいる民族は，ユカテクやキチェなどのマヤ語族（約500万人）とサポテカやミシュテカなどのオトマンゲ語族（165万人），ユートアステカ語族に属するナワ諸語（アステカ文明のナワトル語も含んで120万人）が中心で，そのほかミヘ＝ソケ語族（17万人）やトトナカ語族（22万人）やタラスコ語族（10万人）などがいる（図参照）。

彼らは征服以後虐げられた生活を余儀なくされてきたが，最近は教育や社会変化のため，彼らのほとんどは母語とともに，スペイン語を操れるようになってきた。オアハカ州やグアテマラなどでごくふつうに見られた，後帯機（こうたいばた）で織った民族衣装をつけた女性も少なくなってきている。トウモロコシを主食にし，昔ながらの生活を営んでいるようにみえるが，確実に現代文明に取り込まれつつある。同時に失われつつある自分たちの文化を見直す気運も高まっている。

93年のグアテマラのキチェ・マヤ人であるリゴベルタ・メンチュ女史のノーベル平和賞受賞や，94年のメキシコのチアパス州のサパティスタの蜂起などからわかるように，最近は民族運動が活発になっている。グアテマラでは，マヤ・アカデミーができ，母語をアルファベットで記し，法律なども母語でも記すべきだという運動が盛んになっている。その成果のひとつとして，文字（正書法）が法律で定められた。言語名もその表記法に則り変えられた。その結果，たとえば，キチェの場合だと，Quiche から K'iche' に，ケクチの場合だと，Kekchi から Q'eqchi' という綴りになった。ところが，それまで読めていた名が，声門閉鎖を表すアポストロフィをつけたために，どう読んでよいかわからないという，皮肉な現象が起こっている。それは，権利を主張するあまり，自らが受け入れを拒否するかたくなな態度になってしまっている彼らを象徴しているように思えてならない。